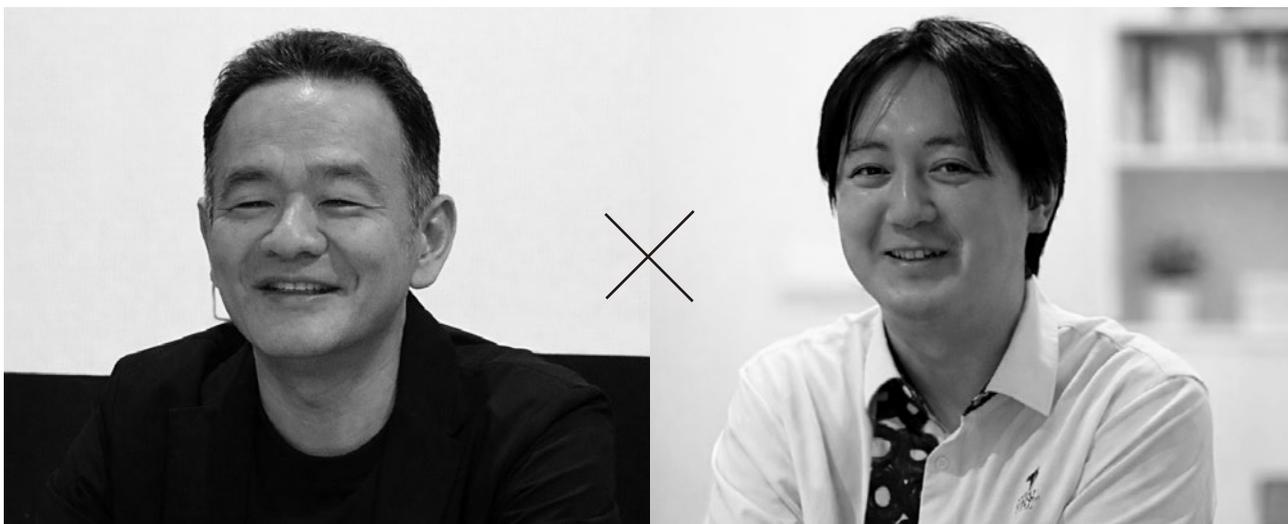


対 談

デザインとの協働でひらく、 地域医療の可能性



筧 裕介さん

特定非営利活動法人issue+design代表

守本陽一先生

公立八鹿病院内科・総合診療科

価値観を揺るがす原体験から、 ソーシャルデザインの道へ

守本陽一 近年、医療分野でもさまざまなデザインの視点を持つ方々との協働が増えてきています。そこで今回は、ソーシャルデザイン・地方創生のトップランナーであり、『認知症世界の歩き方: 認知症の人の頭の中をのぞいてみたら (ライツ社, 2021年)』の著者として知られる筧裕介さんをお招きし、地域医療においてデザインがどのような可能性を持つのか、その視点からお話を伺っていきたいと思います。まずは、筧さんのこれまでのキャリアについてお聞かせいただけますか。

筧 裕介 大学で社会学を学び、1998年に博報堂に入社しました。広告に興味があったわけではないのですが仕事は刺激的で面白く、夜中まで働くこともありました。その中でも次第に「もっと世の中に長く残る、大きなものをデザインしたい」という思いは持っていました。

大きな転機は、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロです。当時ニューヨークに滞在しており、現場の近くでその瞬間を目撃しました。一瞬で日常が壊れ、戦争や宗教、人種といった問題が渦巻く現実を前に、「社会全体に対して自分は何ができるのか」を考えるようになりました。

そこで、東京大学大学院に進学し、建築、土木、都市計画の中で特にスケールの大きい「街全体

をどうデザインするか」というテーマに向き合いました。当時まだ「ソーシャルデザイン」という言葉もなく、学んだのは都市工学や都市計画、地域計画などの分野でした。その後東京大学先端科学技術研究センターで博士課程を修得し、そこでstudio-L代表の山崎亮さんと出会って議論を重ねた日々が、今の活動の基盤になっています。そうした流れの中でissue+designを立ち上げ、博報堂を離れて現在の仕事に専念するようになりました。

守本 studio-Lの山崎亮さんも病院の移転のコミュニティデザインプロジェクトなど、医療や福祉との連携が深いですね。山崎さんとは、どんなお話をされていたのですか。

寛 博士課程の研究室は、ビジネスの現場とはまったく違い、自分たちが自信を持って提案したプランを「意味がない」と徹底的に否定されるような世界でした。その反動もあって、食事をしながら山崎さんはコミュニティデザイン、僕は社会課題とデザインについて語り合い「いつか一緒に何かやろう」と話していました。そして最初に形になったのが「震災+design」¹⁾と「できますゼッケン」²⁾です。

守本 当時、それが仕事として成立するという感覚はありましたか。

寛 正直、まったくなかったですね。2008年から3年ほどは、「何を言っているのか分からない」と言われ続けました。ただ、東日本大震災をきっかけに潮目が変わり、そこに地方創生の流れが重なって、少しずつ予算も付くようになった。仕事として形になり始めたのは2010年代前半です。

守本 『人口減少×デザイン(英治出版、2015年)』はその少し後ですね。学生の頃に読んで、とても印象に残っています。

寛 はい。日本創成会議で「消滅可能性自治体」が話題になった時期です。その前に『地域を変えるデザイン(英治出版、2011年)』を出していて、

その流れで『人口減少×デザイン』を書きました。人口減少を正面から扱ったことで、地域の現場との接点が一気に増えました。

守本 広告代理店で培った企画力と、都市計画、デザインの視点を持って地域に関わる中で、手応えのようなものはありましたか。

寛 理解されるまでに時間はかかりましたが、「それは必要だ」と言ってくれる人が少しずつ現れ、地域が変わっていくのを実感するような場面もありました。

僕が本を書くときに一番意識しているのは、地域の現場で一生懸命に動く守本先生のような医師や教員、行政職員の方々に「分かりやすく、使える」知恵を手渡すことです。本をきっかけに実際に何かを始めた、という話を聞けるのは、とても嬉しく、確かな手応えを感じる瞬間です。

地域が育つプロセスを焦らないこと、楽しめる場にする

守本 地域でのプロジェクトを進める上で、大切にされていることは何でしょうか。

寛 広告や一般的なデザインの仕事と大きく違うのは、「自分で動かないこと」「委ねること」「手放すこと」です。広告は期限が明確で、短期間で成果を求められますが、地域や行政、医療の現場は時間軸がまったく違います。最初は1年で成果を出さなければ続かないという前提で取り組んでいましたが、それでは本質的な変化は起きにくい。やはり3年、5年という単位で人との関係を築き、当事者が少しずつ変わっていく中で、段階的に委ね、手放していく。そのプロセスこそが重要だと考えています。

守本 地域医療も同じですね。人の入れ替わりが多く、短期間で課題を解決するのは難しい。だから大きな改革を見据えつつ、小さな改善を積み